

連珠っておもしろい

名人 河村典彦

●第10回●

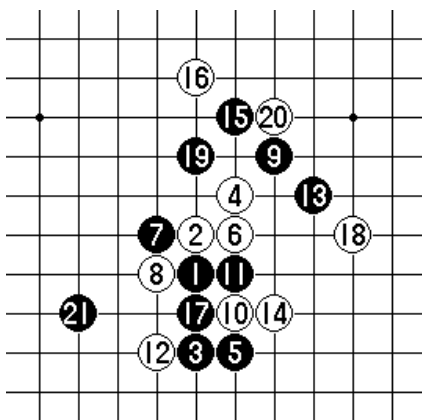
名人復位

この11月に山口名人との五番勝負で3勝1分の成績となり、久々の名人位に返り咲くことができた。1次予選からの出場で長い道のりではあったが、結果的に無敗で駆け上がったのは幸運という他はない。では、五番勝負の第1局を振り返ってみよう。なお、本局は連珠世界12月号で岡部君の解説が掲載されているので、そこにはなかった事項を中心に述べたいと思う。

瑞星の指定はまずは様子見もあって予定通りである。山口名人なら白かと思っただ、黒でも不思議はない。どこかで変化するだろうとは思っていたが、思いも寄らぬ黒21が飛んできた。東京に移って彼とよく対戦するようになりある程度の変

化レベルの予想はつくようにはなかったが、今回の決定戦では意表を突く変化が多く見られた。

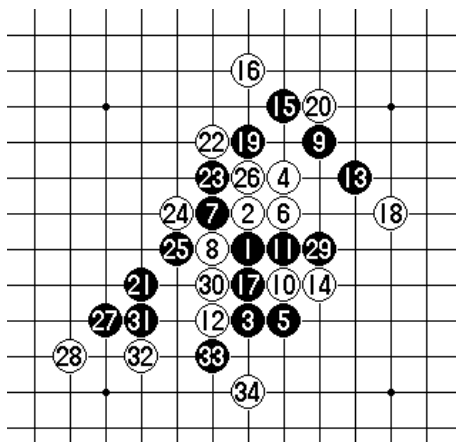
第一譜（黒21まで）



思っても見ない手を打たれたときの考え方は、棋理に照らしてどうなのかを客観的に見てみるのが大事である。よくあるのが、そこに打たなかったのだからそこに打つ、である。この場合は四になり相手の思う壺なので却下。でも基本は相手が何を狙っているかを察知することである。通常より一路広く打ったという

ことは、左辺での攻めを狙っていることは容易にわかる。でも一番の狙いは7と21の石をつなげて下辺に進出しようということである。よって、7と21の二連を牽制する必要がある。そして、少しでも白が有利なように、と考えたのが譜の白22だった。

第二譜（白34まで）



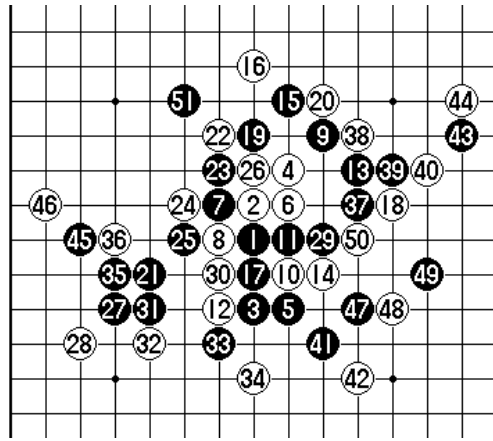
対して黒26と怖がって防ぎに来てくれればしめたもの。もちろんそんな手は打たず、これも予想外の黒23に打たれた。この手はあく

まで黒25を打とうという手で、それだけこの地点が重要であるという証拠でもある。ただし、白22の効果で一旦先手を取れるのが白の自慢である。ということでは白26と打とうとしたが、次の防ぎがわからず長考した。よつぼど27に打とうと思っただが、それだと追い勝ちになりそうなのでやめた。

結局、白26と打ったが、黒27が山口名人らしい四ノビ。伸びなければ叩こうと思っていたので、山口名人でなくてもこう打つところだろうか。

続く白30が変なところだが急所だったようだ。「この手を見つけたら黒がダメですね」と名人が局後語っていたので、この手以外なら自信があったのだろう。この30は、左と右の連絡を確実に絶ったもので、同時に剣先となつていて、黒の牽制役として

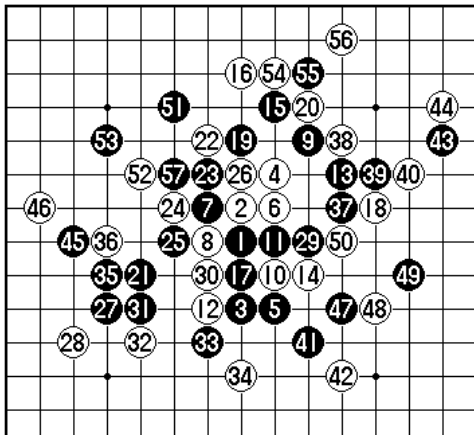
は非常に手の価値が高い。この手を境に白が少し良くなった。しかし、まだ油断はできない。私が本当に少しほっとしたのは、白34に打った時であった。



黒35と白36は交換のよ
うな所で、左辺だけでは勝
ちが出ない。黒37からはよ
くある処理の仕方だが、黒
43に手を抜くと上辺で簡単
に勝ちが出る。それはこれ
まで知らなかった事なので、

読んでみてびっくりした。それを含みに黒41と打たれ、また迷わされた。結局この形では白42の叩きが部分的には最強防ということを確認したが、最後まで冷や汗をかかされる。数々の波状攻撃に耐え、ようやく反撃に転じられるとあって、黒51での満局提案は当然拒否。本局は、ここからの進行がちよっと面白かった。

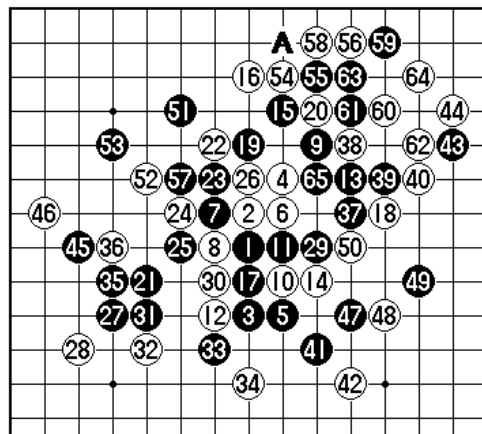
第四譜（黒57まで）



ここからは、時間もない

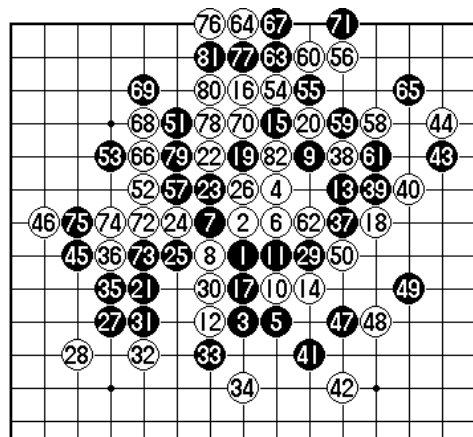
ので良さそうな所に打って相手の防ぎを見て考えると、白54という展開になった。白54に対する黒55、57は第一感有難かったが、具体的にどう打ったらいいか迷った。

参考譜（白64まで）



実は、先に白58と打てば簡単だった。黒59をAは四追いがある。これが読めなかつた。黒59ならそこで白60と打てば黒に受けがなかった。実戦は先に60に打つたため、黒にいらぬ剣先が

できてしまった。第五譜（白82にて黒投了）



四ノビを利用して黒65まで防がれた時は頭が真っ白になった。下手に後手を引くと、黒に勝ちが残っている。それを防ぎつつ新たな開拓を目指したのが白66で、ついて来なかった黒67が敗着となった。白68と引いて勝ちが見えたが、一手ごとに（82は）「三だよな」と確認しながら勝ちを掴んだ。